

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

March 2011 vol.13



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「ちひろ美術館コレクション 世界の絵本をめぐる旅」

展覧会を楽しむ「3つの旅」

企画展「スウィングン・ロンドン 50's-60's —ビートルズとミニスカートに憧れた青春—」

戦後日本のインダストリアル・デザイン

随想 美術館のしごと

汗をかき、ほこりにまみれ、フンを掃く

13



シビル・ウェッタシンハ 「かさどろぼう」より 1986年 ちひろ美術館蔵

「ちひろ美術館コレクション 世界の絵本をめぐる旅」

2011年4月16日(土)～5月23日(月)

休館日:火曜日(ただし5月3日は開館)

開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)



A



B

A. エフゲーニー・ラチョフ『てぶくろ』より 1950年 ちひろ美術館蔵

B. いわさきちひろ『うらしまたろう』より 1967年 ちひろ美術館蔵

展覧会を楽しむ「3つの旅」

この春の企画展は、石見美術館では初めての本格的な絵本原画の展覧会である。ここでは「世界の絵本をめぐる旅」と題した本展を楽しむための、3つの「旅」を提案したい。

まずはなんといっても、世界各国の絵本原画を幅広く収集しているちひろ美術館ならではの、文字通り「絵本による世界各国の旅」だ。小さな物語、一枚の絵の中にも、絵本とその画家が生まれた国の空気や色彩が現れている。例えば、シビル・ウェッタシンハ作『かさどろぼう』(表紙)を見てみよう。スリランカの小さな村を舞台とする物語の最初の場面だ。この村の人たちは、「かさ」を知らないの、雨が降ると布や大きな葉をかぶって外を歩く。雨の中でも人々はあまり困っていなくて楽しそう。力強い線で描かれたおおらかな人物の表情と柔らかな体つき、鮮やかな色と素朴な模様様の衣類、地面から伸びている踊るような草花などが、スリランカに行ったことがない私たちを、一気にのどかな村に連れて行ってくれる。本展では、日本を含めて全部で23カ国の絵本原画を楽しむことができる。絵本という窓から、世界の国々の風景、人々、動物たちをのぞいてほしい。

次の旅は、絵本ならではの「画家の想像力に乗る旅」だ。絵本は私たちを非日常の、

不思議な世界に連れて行ってくれる。ウクライナの民話を題材とした『てぶくろ』は、おじさんが落とした手袋の中にネズミが住みつき、やがてカエル、ネズミ、ウサギ、キツネ、イノシシが加わり、ついにはクマまでが入ってしまうという物語。現実にはありえないこの話を、エフゲーニー・ラチョフは見事に絵本に仕立てている。様々な動物たちの毛並みや暖かそうな手袋の質感、そしてしんと雪の降るロシアの風景が、クレヨンの線描と柔らかな彩色によって、いきいきと描き出されている。私も子どもの頃に楽しく読んだ絵本だが、今回あらためて絵を客観的に見て、画家の表現力や画面構成力の素晴らしさに感嘆した。ひとつひとつのモチーフを丹念に描きながら、「カエルからイノシシまでのたくさんの動物が住みついている手袋」という超現実的なシチュエーションを美しくまとめた作品(図A)を、1枚の絵画としてぜひじっくり鑑賞していただきたい。

さて、3つめの旅は「時間の旅」だ。本展では赤羽末吉の『だいくとおにろく』や、いわさきちひろの『うらしまたろう』(図B)など、日本のお伽噺を題材とした絵本も紹介する。こうした現代の作家の絵本に加え、本展では日本の絵本の歴史をたどるコーナーも設ける。

日本の「絵入り物語」の伝統は奈良時代の絵入りの経典、「絵因果経」にさかのぼる。

平安時代には趣向を凝らした絵巻物が貴族文化の中で花開いた。室町時代には「お伽草子」とよばれる巷に流布した物語を題材にした絵巻が、より多くの階層の人々に愛好されるようになった。江戸時代になると絵入りの版本(印刷された本)によって、絵と物語とを同時に楽しめる本が一般に流布した。これが現在の絵本文化につながっている。昔の人々がどのように読書を楽しんでいたのか、ひととき歴史の旅を楽しんでいただきたい。

最後にもう一つ、ぜひ注目してほしいのが、様々な技法による画面の質感だ。本展は、通常は印刷物として鑑賞される絵本の原画を見られる稀な機会となる。水彩やパステルの繊細な色づかいの作品からは、絵本を見るときとは違った感動を得られるだろう。日本でも大人気のエリック・カールの『はらぺこあおむし』は、彩色した紙を使ったコラージュで制作されている。こうした技法に親しんでいただくため、会期中には水彩やコラージュの技法を体験できるワークショップも開催する。(5月22日開催)

このように様々な楽しみが散りばめられた本展を、子どもから大人まで幅広い年代の方に、ぜひ心ゆくまで旅していただきたい。

(川西由里 当館主任学芸員)

「スウィング・ロンドン 50's-60's —ビートルズとミニスカートの憧れた青春—

2011年7月9日(土)～9月12日(月)

休館日:火曜日

開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

企
画
展



図1



図2



図3

図1. 参考写真「1960年代のロンドンの若者」(写真左端が本展にご協力いただいたデザイナーのポール・リーヴス氏)

図2. ポケットトランジスタラジオ《TR610》 製造:ソニー 1958年 デザイン:山本孝造/五十嵐忠/鹿井信雄 マイケル・ホワイトウェイ蔵 Photo ©Michael Whiteway

図3. ポスター《ホンダに乗るのは最高に素敵なたち(ナイス・ピープル)》 1962年 デザイン:グレイ広告社(アメリカ) マイケル・ホワイトウェイ蔵 Photo ©Michael Whiteway

戦後日本のインダストリアル・デザイン

ビートルズやローリング・ストーンズが活躍し、モッズ・ルックやミニスカートのツイッギーが登場したロンドン。若者文化の発信地となった1960年代のロンドンは「スウィング・ロンドン」と呼ばれるようになる(図1)。本展はこのロンドンで1950年代から1960年代にかけて若者の日常生活に取り入れられた世界各国のインダストリアル・デザインを紹介する展覧会である。その展示の中には、イギリス、アメリカ、ドイツなどの製品に加えて、日本の製品も登場する。現在では世界でも有数の工業製品の輸出国となった日本であるが、1945年の敗戦からスタートせざるを得なかった戦後日本の工業製品はどのように成長していったのだろうか。

長期間の戦争に疲弊した終戦後の日本は1952年までアメリカを中心とするGHQによる占領下に置かれる。壊滅的な打撃を受けた日本の産業であったが、この占領が日本のデザインにとって、大きな意義を持った。日本の場合、モダン・デザインは戦前には理念として受け入れられる程度で、一般に広まるまでには至らなかった。またそれは、ドイツの機能主義の影響が大きく、その理想に基づいた試作的な製品などが製作されていた。これに対して、戦後はアメリカの圧倒的な影響を受け、モダン・デザインが広がっていく。

例えば、日本は占領軍兵士とその家族のための住宅2万戸と家電製品などの備品を、短期間に生産、納品することを求められた。それまで、伝統的な生活が一般的だった日本では、これほど大量に西洋の近代的な生活に基づいた家具や備品を製造することはなかったため、この仕事はメーカーにモダン・デザインについての実際的な経験をもたらした。また一般市民にとっても占領軍の兵士たちに日常的に接触するようになったことは、アメリカ的な豊かな生活への強い憧れを生んだ。そして、1951年には、アメリカのデザイナー、レイモンド・ローウィが来日した。ローウィは、戦前から活躍していた世界的に有名なデザイナーで、流線形の機関車や冷蔵庫、「ラッキーストライク」のパッケージのデザインなどを手がけている。日本でローウィに依頼されたたばこ「ピース」のパッケージデザインは、その破格のデザイン料と売り上げで、関係者にデザインの重要性を思い知らせたのだった。

その後、海外からの技術導入や、政府による産業育成政策によって復興した日本の工業は、好景気にも乗り急速に発展していった。日本の工業の発展を象徴するように、ソニーは戦後設立されたメーカーであるが1950年代後半には世界的なヒット商品

となるトランジスタ・ラジオ(図2)を生み出した。世界初の小型トランジスタ・ラジオはアメリカ製だったが、世界市場で大きなシェアを占めたのは、このソニーの製品だった。さらにトランジスタの技術をテレビに応用したポータブル・テレビを開発し、そのデザインは1960年のミラノトリエンナーレで金賞を受賞している。ホンダもまた戦後創立されたメーカーであるが、1958年に発売されたスーパーカブが大ヒットし、アメリカにも輸出された。大型のプラスチック部品を採用したスーパーカブは、オートバイを製造しやすく安価で運転が楽なものにした。当時のアメリカの広告(図3)をみると、スーパーカブに乗ることがファッショナブルであるというイメージが伝わってくる。こうして1960年代には、世界中に日本の工業製品が広がっていった。

トランジスタ・ラジオ、ポータブル・テレビやスーパーカブは、いずれもコンパクト、シンプルで日本的な美意識を反映したデザインといえるだろう。そして、日本は1968年には早くもGNP(国民総生産)世界第2位の国になる。戦後アメリカを目標に出発し、現在ではトップクラスの工業製品とそのデザインを生み出す国となった基礎は、この時代に築かれたのである。

(河野克彦 当館主任学芸員)

随
想

美術館のしごと

汗をかき、ほこりにまみれ、フンを掃く

国内外の有名美術館のコレクションや大物アーティストの作品など、誰もが一度は見てみたい、そんな作品を展示するのが美術館に求められる役割のひとつだろう。地方に所在する美術館とはいえ、なるべく良質な作品をご覧いただけるよう、展覧会事業を組み立てている。しかし、そんな既によく知られた作品のみが、美術館で展示されるべき作品というわけではない。ときに「こんな作品もありますよ」と学芸員による新たな提示がなされることは、美術館が単なる四角いハコではないことを証するための大きな仕事である。

さらに言えば「この場所にある、この美術館だからこそできること」というのを常に意識していたい。その一例として、その土地の歴史とともに創造され、受け継がれてきた旧家や寺院、神社などに眠る文化財を顕彰することが挙げられよう。そういう意識のもとにこれまでいくつかの展覧会を企画してきた。2009年の企画展「千年の祈り 石見の仏像」や、先般の特別展「雲谷派 雪舟を継ぐ者たち」がそれである。こうした展覧会は、地元の人々すら存在に気づいていない「じつは身近な美術作品」を集めて一堂にご覧いただくというもので、「こんなところにこんな立派な作品があったのか」という素朴な感銘が展示鑑賞の入口となり、地域の歴史文化への理解を深め、誇りを高めることが期

待できる。

実際、こうした活動には一定の評価をいただいているものの、そこに至る準備の過程まで紹介できる機会がこれまでなかった。「美術館のお仕事って、きれいなものに囲まれて幸せですね」といった好意的な見方に反する、現実の学芸員の仕事について知ってもらうのもいいのではない。

上記のような展覧会のための作品は多く地域の寺院などから借用したものである。これらを展示するためには、事前にその寺院に出向き、作品を調査し、写真を撮影する必要がある。所蔵者に趣旨を説明し、協力を仰ぎ、日程を調整し、大がかりな機材を運び込んでようやく調査の段となる。

そして場所は寺院である。便利になった世の中とはいえ、本堂に冷暖房設備を完備している寺院は少ない。お寺の夏はとても暑く、冬はとても寒いのだ。展覧会のスケジュールによっては、真夏や真冬の寺院で暑さ寒さに耐えながら長時間作業することも少なくない。

また調査の対象となる仏像や屏風など、いずれも数百年を経た貴重な作品は、たいていほこりにまみれている。調査に先立って、そんな作品を刷毛などで御身ぬぐいすることが最初の仕事となる。大切にされているものほど、誰からも触れられることがない。永い年月の間にほこりやススは積りに積もって

いる。一刷毛でもわっ、二刷毛でもわっもわっ。場所によってはネズミなどのフンなんかも積りに積もっている。お寺でもしたことのないような大がかりな清掃作業をしないことには調査に取りかかれないこともしばしばだ。とても「きれいなものに囲まれて幸せ」という状況ではない。

しかしこうした苦勞を経て得られるものは大きい。かく調査され、撮影されて、眠れる文化財は初めて衆目を集める作品となる。またこれにより、その作品の制作年代や評価などが学術的に定まり、さらに普及だけでなく研究資料としても有用な写真資料が整うことになる。展覧会というのは宿命的に一過性のイベントとしての性格を負っているが、こうした調査研究によって得られた知見が図録や報告書になることは、着実な成果として後世に残る確かなことである。

先日、地元紙の読者欄への投稿に、こうした展覧会に対する評価の言葉をいただいた。まさに当方が企図したことが来館された方に伝わっていると実感できた。伝わっていると感じられることは、つくづく幸せなことだと思う。美術というのは、作品という目に見える物質を介した人と人との共感にその美徳があるのだと思う。こういう原点を確認するうえで、ほこりにまみれた古い作品は、含むところが大きい。

(椋木賢治 当館主任学芸員)



寺院での調査の様子

